

作物名：水稲

病害虫名：もみ枯細菌病，苗立枯細菌病



もみ枯細菌病
(*Burkholderia glumae*)



苗立枯細菌病
(*Burkholderia plantarii*)



1 被害の特徴と診断のポイント

(1) もみ枯細菌病

出芽直後のごく早い時期に発病した苗では、白色の葉鞘が淡褐色～暗褐色になり枯死する。緑化期以降に発病した苗では、新葉が葉鞘を破って中途からねじれながら湾曲して出葉する。このような新葉は基部が白色に退色し、次第に暗褐色となり、腐敗枯死する。

発生は坪枯れ状となり、葉基部の褐変枯死した苗の中心部を手で引くと基部あるいは腐敗部から容易に抜ける。

(2) 苗立枯細菌病

初期症状は、もみ枯細菌病と酷似しており、識別は難しい。後期症状は、水不足でしおれたようになり、著しく赤茶けた状態で乾枯し、芯は腐敗せず抜けない。

2 伝染源及び伝染方法

・もみ枯細菌病・苗立枯細菌病 共通

発育適温は30～35 で主に種子伝染するが、土壌伝染のおそれもある。

3 発病・伝染好適条件

(1) もみ枯細菌病・苗立枯細菌病 共通

罹病種子の使用(出穂期の気温が高く降雨が多いと初感染が多くなる)、育苗中の高温多湿、浸種・催芽の高温、過度の厚播き

(2) もみ枯細菌病：床土のpHが高い(pH5.5以上)

(3) 苗立枯細菌病：床土のpHが5.0～5.5より低い

4 防除方法

(1) 耕種的防除

病害が発生した苗を移植したほ場及び周辺ほ場からは採種しない。

もみ枯細菌病は、塩水選による保菌物の除去効果が高い。

pHが適切な床土(pH5.0～5.5)を使用する。

催芽・出芽温度は高温にならないようにする。

床土は過湿にならないようにする。特に排水不良や粘質な土壌では発生が多くなる傾向があるので使用しない。

(2) その他防除

温湯消毒など、種子消毒の実施。

5 出典

(1) 参考文献：宮城の稲作指導指針【基本編】，原色病害虫診断防除編1(農文協)

(2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影